

## 論説:土砂災害危険地域で住民に向かい合う

片田敏孝 群馬大学工学部教授

「そいで役場はどう考えてんだ。地区のほとんどが赤や黄色で塗られた地図を前に、晩酌を引っかけたじいちゃんが声を荒げる。土砂災害警戒区域図の説明会は、予想通りの展開で始まった。口ごもる役場の若手職員に私が追い打ちを掛ける。「対策はどうなっているんですか？」まさかの私の裏切り発言にたじろぐ職員。その様子に場が緊張し始めた頃を見計らって、私は続けた。「なぜ役場の職員が口ごもるのかわかりますか。」

住民に対して私は、群馬県には土砂災害警戒区域が7,600箇所もあること、財政上の制約、ハード対策が完了しても完全な安全は保証できないことなどを説明した。もちろん住民は完全に納得はしないものの、直ちに対策が取られない事情を理解した。

「だから先生は、私たちに避難の話をして来たんだな。」住民は役場職員に向かって続ける。「避難の情報くらいはちゃんと伝えてくれるんだろうな。」「出来る限りの情報提供は県とも協力をしてお伝えしますが、完全な情報となると……」役場職員の口ぶりは歯切れが悪い。私は土砂災害が如何に不確実性の高い災害で、警戒避難情報の提供が難しいのかを解説した。ハードもダメ、ソフトもダメという私の説明に、さすがの住民も納得のしようがない。「先生、わしらはどうすれば良いんだ」という住民の問い掛けに、私はあえて毅然と「完全な安全が欲しければここを出て行くしかない」と言い放った。

もちろん私はこの地を離れることを住民に勧めたい訳ではない。切り立った山間の集落に、完全な安全はないことを強く自覚してもらうために、私自身、内心は動揺しながらもあえて住民にはきつい言葉を使ったのだ。私の口からの予想もしない言葉に住民は呆気に取られた様子だった。

住民と私との間に走る緊張感のなか、私は懸命にこの言葉の真意を説明した。もちろん真意として住民に集落を離れることを勧めている訳ではないこと、しかし、この地の土砂災害の危険性を完全に排除することはできないこと、そして住民にはその事実を直視して、この地に住むのであれば最大限出来得る努力をして住み続けるしかないことなどに加えて、私はこの地がハードもソフトも何も対策がない江戸時代から、脈々と維持されてきた事実を指摘した。

なぜこの地が度々土砂災害に見舞われながらも今日まで続いてきたのか。住民にこの問い掛けは響いたようだった。災いをやり過ごす地域固有の知恵の存在。私はそれを活かしてこの地に暮らしてきた先人に対して、土砂災害警戒区域図を見た後の住民の反応を振り返り、如何に住民が行政依存になっているか、そして、その住民の姿勢こそがこの地の最大の危険であることを指摘した。指摘したことは行政依存の善し悪しではない。依存しようがしまいが、それで安全が確保できない以上、地域の安全を確保するための最善の努力をするしかない。しかし、住民が現状のような依存意識に陥

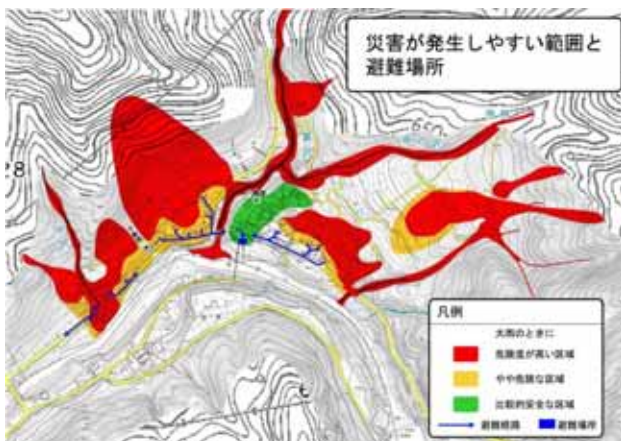


図-1 土砂災害警戒区域図

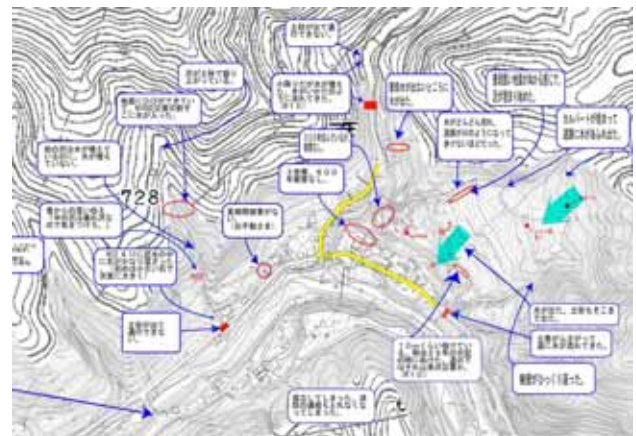
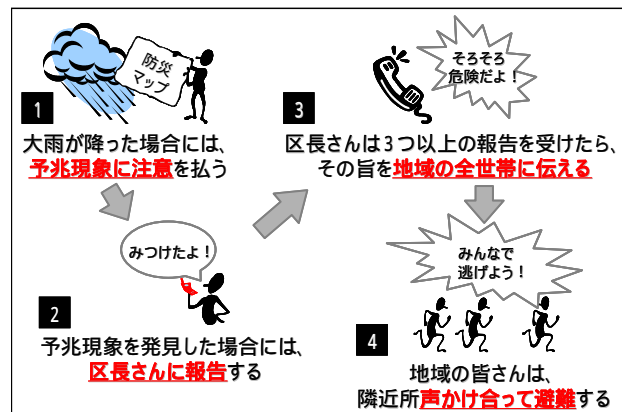


図-2 災いをやり過ごす知恵



写真 懇談会の様子



っているのであれば、その環境のなかで育っている幼き孫たちも、それを常識として育っていく。

孫の話は反則技かも知れないが、この指摘は高齢の住民にも大いに考えるところがあったようで、住民は口々に昔聞いたことがある災害時の予兆現象や言い伝えなどを語り始めた。

この後、説明会は回数を重ね、いつしか地域の自主防災会議となった。土砂災害警戒区域図は、かつての災害時の予兆現象や地域に伝わる予兆を書き記した付箋で埋まった。これが次世代に引き継ぐべき、地域の災いをやり過ごす知恵の集大成であり、これを地域住民自らが活かして地域の安全

を確保する手段が熱心に相談された。いつしか行政と住民の緊張感はなくなり、説明会の場が和んでいた。

住民が出した結論は、出来上がった知恵の集大成を利用し、区長発の自主避難勧告を発令するという地区ルールを作成であった。地図に示された知恵を土砂災害の予兆チェックリストとし、住民がセンサーとなって自宅周辺を監視し、それを見つけたら区長に連絡し、区長は住民からの通報が3つになったら自主避難勧告を発令する。住民は声を掛け合ってみんなで避難するという。土砂災害警戒区域図の公表は、山間の集落の地域防災力を飛躍的に高めた。